特殊報

７ 病 第 ２ ５ 号

令和７年１０月１０日

関係各位

京都府病害虫防除所長
（ 公 印 省 略 ）

病害虫発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので、送付します。

◇

# 発生予察特殊報第２号

**病 害 虫 名　キモンホソバノメイガ**
*Sinibotys butleri* (South)
**作 物 名　タケ類**
**発 生 地 域　京都府南部**

## １　発生経過

（１）令和７年７月、京都府南部のタケノコ園において、タケの葉に食害痕が多く認められ、赤いチョウ目幼虫が地際に集まり、タケの株元や建造物の隙間で繭を作ったのち蛹化する個体を多数認めた。蛹を採集し羽化させた成虫を農林水産省神戸植物防疫所に同定依頼したところ、キモンホソバノメイガと同定された。
（２）本種の幼虫及び食害痕は、府南部の多数のタケノコ園で認められた。
（３）本種は中国原産で、国内では平成 18 年に愛知県で侵入が確認された外来種で、以後各府県で発生が確認され、近畿地方では令和３年以降に発生記録があり、令和７年９月に大阪府で特殊報が発表されている。京都府内でのタケノコ園の被害の報告は今回が初めてである。

## ２　形態及び生態

（１）本種はチョウ目ツトガ科に属し、成虫の前翅長は約 13 ㎜、開張は 16～28 ㎜、前翅の地色は暗褐色で、外横線の内側に大きな黄色の斑紋があり、外縁部も狭く黄色く縁どられている（写真１）。
（２）産卵は、タケの葉の裏側に数十個の卵塊状に産下される（写真２）。
（３）孵化した幼虫は、１及び２齢期には体色が淡黄色～黄緑色で模様は目立たないが（写真３）、３齢以降は体色が緑色となり胸部及び腹部後端の特異的な黒斑が明瞭となり、４齢以降は頭部に茶褐色の明瞭な斑紋を示す（写真４）。
（４）終齢は６齢で体長は最大 32mm 程度となり（写真４）、タケの株元や地際の建造物の隙間などに移動して体色が赤くなり（写真５）、枯葉や土粒などにより繭を作り、第１世代幼虫は蛹化する（写真６)。
（５）第２世代幼虫の一部は、繭を作ってその中で越冬すると考えられる。

## 3　被害の特徴

寄主はタケ・ササ類で、若齢幼虫が集団で葉の表面を残して食害し、葉を表から見ると、加害された部分は白く見える（写真７)。４齢以降は単独で加害し、１枚の葉を円筒状にして食害し、最後は矢じり状の特徴的な被害葉となる（写真８）。

## 4　発生消長

本種は成虫が年に２回発生するとされており、当所（亀岡市）に設置のスマートモニタリング装置（虫を LED 灯で収集し、画像を撮影し虫種を識別する予察灯）画像の目視による識別を行ったところ、発蛾盛期は令和６年、令和７年とも１回目は６月中旬、２回目は８月下旬であった。

## 5　防除対策

（１）令和７年１０月７日現在、たけのこ（野菜類）において本種に適用のある農薬はないが、植物防疫法第２９条第１項に基づく都道府県の防疫措置として、たけのこのノメイガ類に対する防除には、京都府では当面の間、表１に記載された農薬を使用することができる。

＊詳細は下記の URL 参照

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/nomeiga_article_29.pdf

（２）ほ場内をよく見回り、本虫の発生初期に防除する。

（３）本種の発生が見られた場合は、最寄りの農業改良普及センター又は病害虫防除所に相談する。

＜参考文献＞

（１）間野隆裕・高崎保郎（2011）キモンホソバノメイガの飼育記録及び幼虫，蛹の記載．誘蛾燈 204：41-46.

（２）谷　壽一・谷　優子（2024）淀川水系三川合流域におけるシナチクノメイガおよびキモンホソバノメイガの記録と生態に関する知見．Nature Study 70(8)：8-11，16.

写真１　成虫

写真２　卵塊

写真３　若齢幼虫

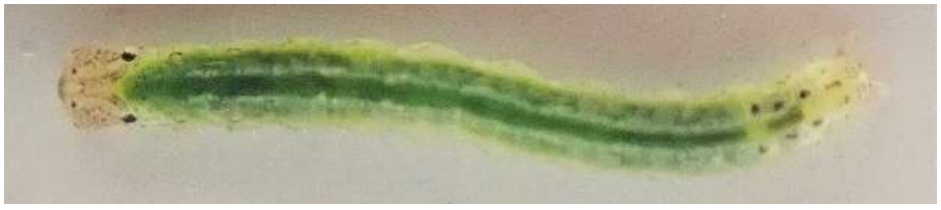

写真４　老熟幼虫

写真５　赤色に変色した幼虫

写真６　繭を作って蛹化する

写真７　若齢幼虫による食害痕

写真８　老熟幼虫による食害痕

表１　植物防疫法第２９条第１項に基づきノメイガ類に使用できる防除薬剤

| 農薬名 | 作物名 | 適用病害虫 | 希釈倍率 | 散布液量 | 使用時期 | 使用回数 | 使用方法 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| エスマルクDF | 野菜類 | コナガ | 1,000～2,000倍 | 100～300 ﾘｯﾄﾙ/10a | 発生初期<br>但し、収穫前日まで | ー | 散布 |

（令和７年１０月７日現在）